

---

# オレとバカどもと召喚獣

奇跡的な人間

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

オレとバカどもと召喚獣

### 【Nコード】

N5181Z

### 【作者名】

奇跡的な人間

### 【あらすじ】

文月学園にやってきたアメリカからの帰国子女の転校生・桐谷颯人は、文月学園学園長・藤堂カヲルの説明を聞かずにテスト時間中に居眠りをしてしまったがためにFクラス配属となってしまった高校2年生。彼はFクラスにて幼馴染である吉井明久と、初恋の人・姫路瑞希と再開する。彼はそのほかのFクラス生徒、坂本雄二・木下秀吉・島田美波・土屋康太と仲を深めていく、バカとテストと召喚獣の二次創作物語。

## オリキャラ紹介

桐谷 颯人 きりや はやと

17歳

いわずと知れた(?)この話の主人公。

特技(または好きなもの) 喧嘩、読書、後たまに悪戯

得意教科 英語(帰国子女) 世界史 数学

苦手教科 日本史(外国に長くいたため、それほど詳しくない。でも一応できる)

容姿 髪色：漆黒 瞳：明るい赤 とうか見た目は『ガンダム SEED DESTINY』にでてくる『シン・アスカ』そのもの小6の途中からアメリカで暮らしていて、現在親に勘当されて日本に1人帰国。仕送りはなく、持ち前の金運で宝くじやらスクラッチで生活している。料理もできる。アメリカに行く前は文月学園がある町で暮らしていて、そのためその町に引っ越して(戻って)来た。学費が安いという理由で文月学園に転入。昔アメリカに行く前は吉井明久や姫路瑞希と同じ小学校に通っていて、仲が良かった。吉井明久とは親友で、姫路瑞希には好意を抱いていた。無論、今でも抱いている。文月学園はテストの成績が悪くても入れると聞いたので試験の間は爆睡。しかし本気を出せばAクラスどころか学年主席も造作もないが、本人の気まぐれと人の話を聞かないせいでFクラスになった(テストの成績でクラスが決まることを知らなかった)。そのため、学園長には恨みを持っている。

『これも全て、クソババア(学園長)の仕業なんだっ、』が口癖だったり・・・しないか。

資料などは完璧に熟読するほどのマニユアル族。たとえるならそれは後藤慎太郎さんの様。そのため文月学園の試験召喚戦争による教室奪取システムを完璧に理解している。

学力、策略、運動神経どれも人間離れしており、学力ではハーバード大学にちゃっっちゃっと入れるぐらいだったりして。端教科でも1000点以上いくことのできる唯一の人物（今のところ）。

一人称は『俺』。気に入らないものは全力でつぶすことを心情にしている。

『俺の事を好きにならない人間は邪魔なんだよ!』

草加雅人に似ていたりは・・・しない（多分）。

召喚獣

格好はザフトの赤服。

武器はハンドガン2丁、と短剣。

腕輪の力は『変身』

召喚獣の姿と武器を変えることができる。点数は消費されない。

腕輪の力で召喚獣が変身する姿

今のところは・・・

1・格好 学ランに変わる。背中にはフォースシルエットの放熱板を兼ねた6枚の翼の様なものが付いている。

装備 ライフルとビームサーベル2つ。

特徴 中距離に特化した装備。フォースインパルス

2 ・格好 西洋風の格好に『超変身』!!!

装備 巨大な剣とブーメラン

特徴 近距離に特化した装備。ソードインパルス

3 ・格好 アメリカ海兵隊の服装に変わる。『Semper Fi

!』

装備 巨大なビームライフルとハンドガンが1丁。

特徴 遠距離に特化した装備。『若干エイっぱいのは気にす

るな!』

ブラストインパルス

また、腕輪の力以外に召喚者の召喚獣の操作技術を極限までに高めることのできる『SEED』を本編の途中で使用可能になる……

・・予定。

## 第1問・転校生、Fクラスへ

颯人「ここか……」

オレが今たっているのは、『文月学園』の正門。オレは今日からここで高校生活を送る。なぜここにいるかって？なぜならテストを行うためさ！

西村「おお前が転入してきた桐谷か、」

うわっ、なんだこの人？なんというか、ゴリマッチョというか、巨大というか、鉄のかたまりというか……

颯人「……鉄人28号？」

西村「なんかいったか？」

颯人「なんでもないです！」

うわっ、ものすごい目で睨まれたよ……目エつけられたかも。この人たしか生活指導の先生だよ……最悪だ！

それはさておき、なぜ俺がここに来たのかを説明しよう（さっきした気はするが）。俺は何のなのかは分からないがテストをやるらしい。

西村「テストの前にこのテストの説明をしたいと思う。それは学園長から、どつぞ。」

学園長・・・どうしてたかが転入のテスト（だと思われるもの）に  
学園長じきじきに説明がいるの？

学園長「この学園の学園長さね。」

うわ、なんというか・・・ MONSTER ？

学園長「なんか言ってたさね？」

颯人「い、いえ何も！」

学園長「まずこのテストさわね、転入にはなんら関係がないんじゃ。」

颯人「はあ！？それどういう意味ですか？」

学園長「ようは0点とっても入れるって事さね。」

颯人「じゃあオレ寝るわ。」

学園長「はあ？」

颯人「はあ？じゃねーよ！今何時だと思っているだよ！12時だぞ！  
深夜の12時だぞ！良い子はみんな寝ている時間だぞ！その時間を6時間も使つてなんの意味もないテストなんかやるもんか！」

学園長「ちょい待ち！まだ説明は・・・」

颯人「・・・くかー・・・くかー・・・」

学園長「って聞いてないか・・・もったいないねえ、こいつもやれば学年主席も目じゃないっていつのに・・・」

そして、陽はまた昇る。

颯人「フアアアア~~~~・・・あれ、そついや登校時間って何時だ？」

俺は手持ちの生徒手帳を確認。

ワオ、7時50分。

今は？

颯人「・・・7時48分。」

転入初日に遅刻！？

そんなのダメだ・・・遅刻なんてしたらみんなからの第一印象というものが・・・

今、オレは脳内で4枚のカードを持っている。・・・いわばライフカードだ。

1枚目のカード 『ダッシュ』



2枚目のカード 『就寝』  
3枚目のカード 『不登校』  
4枚目のカード 『遅刻』

・・・ダメだ。まず不登校は良くない。転入初日から不良生徒というまったく不必要なレッテルを貼られてしまう。このまま就寝もよくない。オレは2枚目のカードと3枚目のカードを脳内で破り捨てた。残るカードは『ダッシュ』と『遅刻』。まず考えてみよう。もしオレが普通に何事もなかったかのように遅刻してきたら・・・

\*\*\*\*\*

妄想中

ガラガラガラ

オレ『こんにちはー、どーも遅れましたー』 棒読み

先生『転入初日とはどういうことだ!』

予想されるみんなの反応『あいつなんなんだよ・・・』 『何調子に乗ってやがんだ・・・』 『ぶっ殺す』

妄想終了

\*\*\*\*\*

・・・ダメだ。先生からの印象も悪くなるし、周囲からも・・・最後のひとつはまあ、ないか・・・オレは脳内で『遅刻』のカード

を破り捨てた。俺に残された道・・・それは、『ダッシュ』!!!  
これを導き出すのにわずか0.09秒。最初からそうしろよ、だっ  
て?そんな言葉、オレには聞こえないな。

そう思っていると、鉄人28号・・・じゃなかった西村教諭がオレ  
ところに来た。

西村「桐谷・・・お前のクラスを覚えておく。」

そういうと西村教諭はオレに封筒を渡した。俺はその封筒を開ける  
と、中から出てきた紙は・・・

『桐谷颯人 Fクラス』

別にこんなご丁寧に封筒に入れなくても・・・そう言っている暇な  
ど、到底なかった。現在、午前7時58分39.013秒・・・!

俺はダッシュで教室に向かった。場所はどこだか分かっているかっ  
て?そんなの生徒手帳に載っていただろ・・・俺はマニュアルが大  
好きなんだ!(後藤さんふうに)

颯人「s腹の虫「ぐうううう」」

そっぴや朝飯もまだだった・・・でも、今はそれどころじゃない!

Fクラスがあるのは旧校舎・・・旧校舎に向かうには新校舎にある  
階段を上っていかなきゃいけない。まず見えたのは・・・Aクラス  
・・・スゲー、エアコンにノートパソコン、リクライニングシート

があればシステムデスクまで・・・これはもしかするとFクラスもこんな設備か!?

俺は走りながら順にBクラス、Cクラス、Dクラス、Eクラスを見た。・・・なんか、設備だどんどん悪くなっているようで・・・それと中にいるやつも、どんどんバカっぽいやつが多くなってきた。

そしてFクラス。これは・・・設備は廃屋そのものじゃねえーか!机と椅子にいたっては足の折れた卓袱台と腐った畳、綿の殆ど入っていない座布団・・・おまけのチョコクとかの消耗品もろくにねえだど!!!? いったいドウナツテイルンダ!?・・・ダメだ、めまいがしてきやがったぜ・・・これが本当の『orz』ってやつか・・・ゆるさねえ・・・オレをこんな廃屋同然のクラスに入れやがったクソババア(学園長)!オレはいずれ絶対お前をブッコロス!

俺は教室の中をチェックした。・・・なんだこの教室。アホ面ばっかじゃん。おまけに女子がいな・・・あつ1人いた。やっぱ女子がいるとドンだけみすばらしくても華があるよね。

???「おや、君は」

俺は後ろを振り返った。そこには教師らしき人がいた。

颯人「あつ、新参者ツス。」

福原「そうですか、君が転校生の・・・私はこのクラスの担任の福原です。よろしく」

颯人「あつ、どうも」

そついうと福原教諭はクラスの中に入った。

福原「えーではみなさん、席についてもらえますか？HRを始めますので」

福原教諭はざわついているやつらが黙るを待ってから壇上でゆつくりと口を開いた。

福原「えー、おはようございます。二年F組担任の福原慎ふくはらしんです。・

よろしく願います。」

あちゃー・・・チヨーク無いから黒板に名前書くのあきらめちゃったよ。

福原「ではみなさん・・・全員に卓袱台と座布団は支給されていますか？不備があれば申し出てください」

生徒「せんせー、座布団に綿が入ってないです」

福原「仕方がないので我慢してください」

生徒「せんせー、窓が割れてて隙間風が寒いです」

福原「・・・・・・我慢してください」

生徒「せんせー、卓袱台の足が折れました」

福原「ボンドで直してください」

大丈夫かよ、こんなクラスで・・・ポンドしかないクラスってなんだ・・・っーかなんでポンドはあるのにそれ以外なんにもないんだ!?!?.....ひどすぎる。先が思いやられるよ・・・

福原「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね、転校生君からやってもらいましょう」

ざわざわ.....

生徒「男だろ?どーでもいい.....」

生徒「かつたりー.....早く帰りさせろよー」

壮絶だな・・・確かにオレも転校生が女子じゃなかったとき、あーあくらいにはなるけどさ!?!?本人が聞こえるように言わなくてもよくね!?!?

俺はAクラスの教室を見ようと首を伸ばした。無論、見えるわけもない。見えるのは向こう側の階段だけ。

福原「では、桐谷くん、入ってきてください」

はあー.....、しかない、行くとするかな.....

俺は視線をFクラスという名の現実に戻した。

ガラガラガラ

オレがFクラスの教室に入ったとき、向こうの階段から誰かが来た。ピンク色の髪をした、俺の幼馴染が.....



## 第2問・自己紹介、このクラスで生きていける気がしない

問題（化学）

『調理の為に火にかける鍋を制作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。このときの問題とマグネシウムの代わりに用いるべき合金の例を1つあげなさい』

姫路瑞希の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると、激しく酸素と反応するため危険であるという点

合金の例……ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので鉄ではダメと言っひっかけ問題なのですが、姫路さんは引っかけかりませんでしたね。

桐谷颯人の答え

『問題点……ダグバの超自然発火能力に対抗できるのは凄まじき戦士だけだという事

合金の例……アマダムの霊石』

教師のコメント

Fクラス所属になったからといって適当に書かないでください。

土屋康太の答え

『問題点……ガス代を払ってなかったこと』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え

『合金の例……未来合金）　すごく強い』

教師のコメント

すごく強いと言われても。



side 颯人

福原「では、桐谷くん、入ってきてください」

ガラガラガラ

福原教諭の言葉でオレはFクラスの中に入った。

福原「桐谷くん。軽く自己紹介をしてください。」

する必要あるかよ・・・オレは内心そう思った。ほとんどのやつはごちゃごちゃしゃべっていて聞く耳もないだろう。しかしオレは一樣聞いてくれる人がいるのを確認してから自己紹介をした。

颯人「桐谷<sup>きりや</sup>颯人だ。んーと・・・アメリカからの帰国子女で、英語が得意だな、後その分日本史は苦手だ。趣味は喧嘩ときどき読書。得意な事は料理かな・・・っーわけだ、1年間 夜露死苦。」

俺はサムズアップを決めて、その直後サムズダウンをした。

さつと趣味と特技を言ったところでFクラスの面々が色々呟いている。

『けっこう可愛い顔してるな・・・』

『秀吉の次くらいじゃないか?』

『桐谷ちゃん結婚して』

Orz・・・確かにオレは女顔だよ・・・だけどさー、結婚してく

れは、ないよな……。だまれBL。今オレはとても不機嫌なんだ（クソババアとBLのせいで）。オレにそんな趣味はない。けどまあ、一応釘刺しとくか。

颯人「ああそういえば……。もしもオレを女顔を呼ばわりしたやつは、もれなくオレから地獄への永遠旅行の『プレミアムチケット』をプレゼントします（満面の笑みで）」

この一言がFクラスの男子の顔を青くした。やべっ、悪い空気作っちゃまったな……。どうしようかな。

「しつもーん」

一人が手を上げてきた。このきまづい空気を直すにはそういうのがいい、さあどんどん来い！

「頭はどのくらい悪いですかー？」

颯人「……はい？」

「振り分け試験の成績はどうなんですかー？」

颯人「えーと……。振り分け試験ってなーにー？」

「お前知らないのかよ、ほらテストだよ。クラスわけのための！そんなことも分からないのかよ！」

振り分けテスト……。そういやあ今日（？）やったなあ、テスト。もしかしてあれが？あれが振り分けテスト？あのババア確か0点でも入れるって……

颯人「・・・あんのクソババア！ぶつ殺す！そんな大事なテストだなんていつてなかったじゃねーか！」

・・・ハッ！やべえ・・・なんかさらにキマズイ空気なっているよ  
うな・・・まあいいや質問に答えよ。

颯人「・・・テスト中、爆睡していたから。つってもアメリカいた  
ころは順調に行けばハーバードまでいってノーベル賞ぐらいはとれ  
んじゃ・・・」

オレがそういつたらみんな吐血した。

颯人「・・・ないかって周囲に言われていたけど・・・」

まあ普通にこんなやつが最低クラスにいたら結構な問題だよな・・・

俺がそう考えていると、教室に誰かが入ってきた。

ガラガラガラ

????「すみません！遅れちゃいました！」

教室のドアが開き、息を切らせて胸に手を当てている女子が現れた。  
どこか面影が・・・っーか俺はコイツのことを知っている。

福原「丁度良かったです。今自己紹介をしているところなので姫路さ  
んもお願ひします」

瑞希「は、はい！あの、姫路瑞希といます。よろしくお願いします。」

颯人「……………瑞希？」

そこにはオレの幼馴染、姫路瑞希がいた。

瑞希「あれ、あなたはもしかして……………」

颯人「覚えてない？小6のころアメリカにいった……………颯人だよ。」

瑞希「えっ！やっぱりあの桐谷君なんですか!？」

どうやら思い出してくれたようだ。……………そして誰かが立ち上がった。

???「えっ！もしかしてあの颯人だったの!？」

颯人「お前は……………明久？なんだ明久だったのか!？」

明久「いや〜全然気付かなかった!？」

颯人「なんだよ二人とも……………俺は一見しただけで分かったのに……………」

オレがそういうと、バカ風情の一人が瑞希に質問した。

「はいっ！質問です!？」

瑞希「あ、は、はい。なんですか?？」

登校するなり、オレと再開するなり、質問がいきなり自分に向けられて驚いている。昔をおもいだすな。

「なんでここにいますか？」

あっそれ、オレも思った。瑞希って小学校のころあいつは成績優秀だった。

『確かにそうだ。姫路さんは学年次席に匹敵するんじゃないのか？』

『どういうことだ？』

『桐谷みたいに居眠りしたんじゃないのか？』

『姫路さん結婚して』

俺のことはさておき、最後のやつ、『オレはお前をぶっ殺すぞ、このヤローっ！』オレはそういう意味でそいつを睨みながらポケットからメリケンサックを取り出した。どうしてこれを持っているかって？アメリカの『閻ルート』のおかげさ！！

瑞希「そ、その……………振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました……………」

ああナルホド。そういえば瑞希って大事なテストとかがあると勉強しすぎて体壊したりしていたな。

颯人「……………プツ、」

やべつ、思い出し笑いしちゃった。

『そういえばオレも熱（の問題）が出たせいでFクラスに』

『ああ、化学だろ？あれは難しかったな』

『俺は弟が事故に会ったと聞いて実力を出し切れなくて』

『黙れ一人っ子』

『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて』

『今年一番の嘘をありがとう』

お前ら『バカ』と一緒にいるのが疲れてきた。

福原「では二人とも席についてください。」

オレは開いていることもあって明久の隣の席に座った。瑞希は俺の隣に。

颯人「なんか昔を思い出すな〜、」

明久「そういえば昔もこの3人でよく遊んだりしていたっけ。」

昔を思い出すな〜・・・

福原「では他の人たちも自己紹介をどうぞ。廊下側の人からお願いします。」

先生が次の生徒に自己紹介を促す。まあ一応転校生なんだし真面目に聞いとくか。願わくば楽しく学校生活をすごす仲だし。

秀吉「木下秀吉じゃ。演劇部に所属してある」

颯人「へえ〜あいつ服装変えたりとかしたら女にしか見えないだろうな、」

明久「え？颯人、秀吉が男だつて判断したの？」

颯人「え？判断も何も見るからに男じゃん。」

秀吉「本当か！おぬしだけじゃ！ワシを一見して男だと信じてくれたのは！」

颯人「あつ、そうなの・・・」

急に驚いた〜・・・まあ確かに男なのに女呼ばわりされるのは嫌だな・・・まあ仲よしておいたほうがいいか。

秀吉「ふう・・・という訳じゃ。よろしく頼むぞい。」

しゃべり方がなんか違和感あるけど・・・演劇部のなんかか、まあいつか。

土屋「・・・・・・・・・・・・・・・・土屋康太」

大人しいやつだな。その手にあるカメラでさつき瑞希をとっていた気が・・・・・・・・

島田「島田美波です。ドイツ育ちで日本語は会話は出来るけど読み書きが苦手です」

あれ、土屋ってやつ(self introduction)の自己紹介これで終わり? まあいいや、この人の自己紹介聞いたことと。

島田「趣味は吉井明久をイジったり殴る事です」

颯人「今さらって酷い事言っただよね!？」

こんなやつらと自虐自虐で俺はここで生きていけるのか・・・だめだ、死にそう・・・



### 第3問・試召戦争開幕？、明久は疑いようのないバカだった

バカテスト 国語

#### 第二問

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい。

- 『(1) 得意なことでも失敗してしまうこと』
- 『(2) 悪いことがあった上に更に悪いことが起きる喩え』

姫路瑞希の答え

- 『(1) 弘法にも筆の誤り』
- 『(2) 泣きつ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも(1)なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、(2)なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがありますね。

桐谷颯人の答え

- 『(1) 名護さんも警察に逮捕される』
- 『(2) オンドウルルラギッタンディスカーにウゾダドンドコドーン』

教師のコメント

『書くのがめんどくさかった』という消しあとがありますが、そう思っのならちゃんと答えましょう。

土屋康太の答え

『(1) 弘法の川流れ』

教師のコメント

シユールな光景ですね。

吉井明久の答え

『(2) 泣きつ面蹴つたり』

教師のコメント

君は鬼ですか。

side 颯人

カウント・ザ・クラスメイトズ

現在俺が名前を覚えたクラスメイトは……（ただし幼馴染である  
瑞希と明久はノーカウント）

・木下秀吉

・土屋康太

・島田美波

これからも俺のやる気しだいによって人数は増える！……かもね

なんていつている場合じゃなかった。オレ今すぐにもこの教室と  
オサラバしたいんだ。オレは生徒手帳を取り出した。えーと何かな  
いかな……あつ、あつた。これはえーと……試験召喚戦争？通  
称『試験戦争』。この学校に投入された、『化学』と『オカルト』  
と『偶然』によって完成した「試験召喚システム」で行う、「設備  
の異なる教室状況」を改善するためのクラス間抗争。この戦争にお  
いて使うものは自身をデフォルメした召喚獣。召喚獣はテストの点

数に比例した強さを持ち、点数が高ければ召喚獣も強くなる。・・・  
・・・か、やべーこのバカの集団じゃメチャクチャ不利じゃ  
ん。でもこのクラスにはオレと瑞希が・・・でも俺たちは二人とも  
テストは無効（オレは居眠りだったから無効ではない）になったた  
め0点。点数を手に入れるには試召戦争中に回復試験を受ける必要  
があり、それにより点数を補充する事ができる。でもこれはあくま  
で戦争中であるから、みんながどれくらい試験が終わるまで粘って  
くれるかによる。

颯人「なあ明久、ちよつと・・・いいか？」

明久「えっ？なに？」

オレは明久を外に連れ出した。

明久「それで、話ってなに？」

颯人「この教室なんだけどさあ・・・・・・・・」

明久「ああ、ひどいものだよね・・・」

颯人「何とかできないかな・・・って思ったんだ。それで明久、試  
験召喚戦争、仕掛けないか？」

明久「えっ!？」

さすがにHR中だから人影はないし、これなら安心して明久と話が  
出来る。

颯人「教室の設備をなんとか・・・ねえ・・・こんな風に汚れてたんじゃ、勉強だってままならないし、何よりみんなの身に害が出る・・・第一オレはあんのクソババア・・・もとい学園長がちゃんとテストのことを教えてくれないからオレはこんなクソ以下のクラスになった。・・・だからオレはEクラスからAクラスの全クラスをぶっ潰して、それでクソババアをぶっ殺す・・・もしくは死なない程度の拷問をするつもりだ。」

明久「そこまでしなくても・・・」

????「今の話、詳しく聞かせろ・・・」

颯人「君はFクラスにいた・・・」

明久「雄二!?!?どうしたの!?!?」

雄二「さっきの話を聞いてな、やる気なのか、桐谷?」

颯人「ああ、あんなところにいてやってられるかっての、」

雄二「いいだろう。どうせ俺も、やる気でいたんだからな」

明久「え・・・・・・・・?」

颯人「ふーん・・・・・・・・」

雄二「お前達がやる気ならなおいい。俺も最初からやるつもりでたんだからな」

颯人「……………雄二っていつたか。なにを企んでいるんだ？」

雄二「俺はただ、世の中テストの点数や学力だけが全てじゃねえってことを証明してみたくなっただけなんだ。」

颯人「……………そうか、疑って悪かったな。」

明久「後はみんなに説明するだけだね。」

雄二「そうだな、」

颯人「じゃあやろう！」

『試験召喚戦争』を……！！

明久「じゃあみんなに報告しないとね、」

颯人「じゃあ教室戻るか、そろそろ自己紹介だの終わっているだろうし、」

福原「ではクラス代表の坂本君。君が最後です。自己紹介してください」

雄二が先生に言われて前が出る。

雄二「俺はクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは坂本でも代表でも好きなように呼んでくれ」

んじゃさっそく本題へ、

雄二「皆。このクラスの設備に………不満はないか？」

雄二が間をおいて言う。その台詞に皆は………

『『『大じゃああああー！！！！！』』』』』

でしょうね、この教室に不満を持たないバカはいないよね。……  
つつてもみんなバカか……。まあそれはさておき、この教室はひどいものだ。かび臭い教室に古く汚れた座布団。薄汚れた卓袱台もんなー、やってられないよ。おまけにオレが座つているところなんてカビのせいでキノコはいているぐらいだし……。掃除してるのか、この教室？

雄二「そこで俺はクラス代表として提案する」

皆がごくりと息を飲み………

雄二「俺たちはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

『勝てる訳ないって』

『これ以上設備が酷くなるのは嫌だああ！！！』

「お前バカだろ、」

最後のやつ、お前がそれ言ったらおしまいだよ……お前だってバカだろ？

雄二「まあ皆落ち着け。勝算はある」

「『『『？』『』『』』」

雄二「例えば土屋康太！」

土屋土屋……ああ、さっきのカメラマン君か。

現在あいつは瑞希のパンツの中を見ようとしている。

凧人「ああええと……パパラッチ君は何をやっているのかな……」

オレは土屋を睨んだ。

凧人「そんな瑞希にパンツの中にご執心とはな……」

オレがそういうと瑞希があわてだし、土屋は雄二のほうを見た。

雄二「こいつがああ寡黙なる性識者だ」  
ムツリーニ

「『『『なんだって！』『』『』』」



土屋「……………!!(ぶんぶん)」

颯人「(なあ……)」

明久「(なに?)」

颯人「(『寡黙なる性識者』<sup>ムツリーニ</sup>ってなに?)」

明久「(えーとなんていうか……ムツリスケベ?)」

アナルホド、

寡黙なる性識者<sup>ムツリーニ</sup>。

その名は男子には畏怖と畏敬を。

女子には軽蔑を持って呼ばれている。

『こいつがあのもツツリーニだと!?!』

『本当か!?!はじめて見た!』

ムツツリーニ<sup>ムツツリスケベ</sup>ただけなんだけど、これは結構有名な話……らしい。

雄二「コイツの保健体育の実力はAクラス以上のものだ。恐らく誰もかなわない。それから木下秀吉!」

雄二は秀吉のほうを見た。

雄二「コイツの姉、木下優子はAクラスの中でもかなりの実力者・  
・弟である秀吉にも大いに期待できるだろう！」

何だよ、ただの秀才の弟かよ。なんかもつとすごいのかと思った。

雄二「さらにこのクラスには姫路もいる。主戦力にして切り札だ」

みんなの視線が瑞希に集まり・・・・・・・・

雄二「もつと言えば桐谷颯人も期待できる！」

・・・・・・・・オレにも視線が集まる。

「姫路さんって実力は学年次席レベルなんだろう？」

「最強の切り札じゃないか！！」

「あの転校生も下手すりゃノーベル賞受賞並だろ！？」

「すげえじゃん！あの二人！」

オレは別にノーベル賞受賞並とは一言も言っていない。このまま順調に行けばという仮定の話だ！勝手にでかくするな！？

雄二「それにこの吉井明久もいる」

「？」「？」「？」「？」「？」

みんな、疑問を抱いている。もちろんオレもだ。明久って勉強全然

だつたる？

雄二「コイツは学園はじまって以来、最初の『観察処分者』だ！」

ああなるほど。

颯人「お前・・・もしかしてとは思っていたけど・・・ほんとにバカだったんだな」

明久「それひどいよ！ていうか颯人って『観察処分者』知っているの？」

颯人「モチツ！オレはマニュアルが大好きだからな！生徒手帳によると、『観察処分者』とは、学生生活を営む上で問題のある生徒に課せられる処分。基本的には教師の雑用係でありバカの代名詞。明久はこの学校における『観察処分者』第1号にして唯一無二の存在（笑）。雑用をこなすため、観察処分者の召喚獣は特例として物に触れることができる。このため壁を破壊するなどの行為も可能だが、召喚獣の受けた痛みや疲労は召喚者にフィードバックされる・・・って書いてあるぜ。」

雄二「だがこれではAクラスには勝てない」

『『『『『オイ！！』』』』』

当たり前だ、そんなこといったら勝てない戦に行つて死ぬようなもんぢや。

颯人「だから手始めに1クラス上のEクラスを落とすんだ。うまく

ことを運べば、Aクラスにも負けないからな」

『『『なるほど』』』』

「……こいつらちゃんと分かっているのか？……まあいいか。」

颯人「という訳でバカ（明久）にEクラスに宣戦布告に行ってもらいまーす！」

明久「えー！やだよ！」

下位勢力の宣戦布告の使者はたいていボコボコにされるらしい。

颯人「……明久を使者（死者）として向かわせるのに賛成のもの、手を上げる。」

……スツ みんなが無言で手を上げる音

颯人「つーわけだ、いってらっしゃい 行かなきゃ俺達がお前をボコボコに……」

明久「行ってきます！！」

俺は内心、こう思った。……あいつは真正のバカだな。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5181z/>

---

オレとバカどもと召喚獣

2011年12月24日23時55分発行